

シュヴァーベン地方の都市フィリンゲンの謝肉祭

通史から祝祭の構造を探る

林 敬 太

はじめに

ドイツ南西部シュヴァーベン地方では、現在でもなお「伝統的」だと言われる古風な謝肉祭であるファストナハト (Fastnacht)¹⁾ が開催されている。しかし、それらは時代の状況に応じて姿を変え、時に新しい「伝統」として創造されてきた。つまり、新しい習慣が時を経るにつれ、徐々に「伝統」として定着していっただけではない。一部では、最初から「伝統的」なものを復古する目的で創造されたファストナハトも存在するのだ。そうした「創られた伝統」の祝祭であるファストナハトは、長い歴史の中で宗教教義や自然現象と結びついて発達してきた祝祭と比較すると紛い物かもしれない。また、現代社会の法や倫理と異なる次元で挙行されていた、古代やいわゆる「未開」社会の祝祭と比較すると不完全かもしれない。それでも、ファストナハトのような「創られた伝統」である祝祭が、祝祭の本質的なものまで復元することができている可能性はあるだろう。むしろ、現代に生きる我々は、「伝統」を作り上げ、それを体験することを通じてしか、祝祭の本質へ迫ることはできないかもしれない。今では「伝統的」になっているファストナハトが、どのように「伝統的」になったのかを追究することは、祝祭論の一環でもあり、近現代の問題でもあるのだ。本稿では、ファストナハトが近代化したとされる19世紀中盤以降から現代までを通史的に概観し、変化とその原因を探る。

ドイツでは、記録や資料によって判明している限りでは15世紀ころには既に謝肉祭が行われていたが、時代が下るにつれ、組織化され、近代社会に組み込まれていった。謝肉祭研究者の多くは、謝肉祭が近代化したきっかけを1823年ケルンで開催されたカーネヴァルとしている²⁾。近代化した謝肉祭はケルンから始まって他の地域へ広まり、各地で

-
- 1) 現地ではtが脱落してファスナハト (Fasnacht) と発音し、tを削って表記されることもあるが、本稿では、一般的なドイツ語辞書に採用されている用語であるファストナハト (Fastnacht) に統一する。また、本稿ではシュヴァーベンで催している謝肉祭をファストナハト、比較対象であるケルンのものをカーネヴァル (Karneval)、それらの総称を謝肉祭と呼ぶ。
 - 2) ケルンのカーネヴァルは、ナポレオン戦争後のドイツが政治的に再編されていく状況の中、円滑にカーネヴァルを実施するために組織化された。Euler-Schmidt, Michael / Leifeld, Marcus / Festkomitee des Kölner Karnevals von 1823 e.V. (Hrsg.) : Der Kölner Rosenmontagszug 1823-1945, J. P. Bachem Verlag, Köln 2007. そして、ファストナハトがケルンで起きた変革の影響を受けたことは Vereinigung Schwäbisch- Alemannischer Narrenzünfte (Hrsg.) : Zur Geschichte der organisierten Fastnacht, Dold Verlag, Vöhrnbach 1999 (以下 VSAN:1999. と略称), S.14-15で述べられている。

様々な影響を与え³⁾、2度の世界大戦中は中断しながらも現在まで伝わった。

シュヴァーベンのファストナハトも、19世紀中盤から現代に近いものを開催しているが、ナチ政権時代を節目に大きな変化が起き、現在催されている形になった。

よって、19世紀中盤から20世紀にかけてのファストナハトがどのような経緯を辿ったのかを確認することは、ファストナハトを論じるうえで重要な事だと言える。

本稿ではシュヴァーベン地方の都市フィリンゲン⁴⁾で毎年開催されているファストナハトについて、いくつかの時期に分けて、それぞれのターニングポイントとなる年を取り上げ、その変遷を比較検討していく。ファストナハトは様々な要素を持った祝祭だが、フィリンゲンで特に大きく変化したパレードと儀礼の2つを考察の対象とする。

まず第1章では、過去のファストナハトに遡る前に、現在のファストナハトを確認したい。ファストナハトに関する記述は、地元シュヴァーベンの住民向けに書かれたものも多いため、現代では意味がわからなくなっていることもある。そうした事物は、現在のファストナハトと照らし合わせて推測してゆくことになる。

つづく第2章では、フィリンゲンで最初に近代的なパレードが行われた1843年のファストナハトから話を始める。この1843年に加えさらに1882年、1910～14年の3つの年代のファストナハトで実施されたパレードを概観し、その変遷を分析する。これらの年代については、現地ですべての祭の運営を担ったアルバート・フィッシャー (Albert Fischer 1874-1952) が執筆し、1922年に出版された『フィリンゲンのファストナハト今昔』 („Villinger Fastnacht von einst und heute“) を基礎資料にしている。

さらに第3章では、1939年に開催されたファストナハトについて火曜日の大パレードを紹介し、前章からのさらなる変遷を分析する。1939年のファストナハトについては、当時発行されたパンフレットと地元新聞の紹介記事を元にする。さらに、1939年当時に撮影されたものの、被写体がナチス政権に批判的であったことから公にされていなかった写真が解説をつけて1994年に新聞紙上で公表されたので、それも参照する。

最後に第4章では、戦後に復活したファストナハトに起きた変化を取り上げ、解釈を加

3) VSAN:1999, S. 15. 19世紀の伝播経路には不明な点がある (本稿第2章を参照)。しかし、39年2月22日付のSchwarzwälder Tagblattでは、ファストナハト取材した記事が「ラインラントのカーネヴァルの都と比較すると」という文言をわざわざ書き入れていることなど、シュヴァーベン地方の人々がケルンを意識していることがうかがわれる。実際にケルンから直接的な影響を受けたと考えられる事例もある (本稿第3章を参照)。そこで、本稿においても、シュヴァーベン以外の地で催される謝肉祭と比較する際、ケルンを取り上げる。

4) 1972年に隣のシュヴェニンゲンと合併し、フィリンゲン-シュヴェニンゲンという市になっている。しかし、ファストナハトそのものは合併前からの風習を受け継ぎ、フィリンゲンとシュヴェニンゲンで別々に開催されている。本稿ではフィリンゲンのみを対象とするので、現在について論じる際にもフィリンゲンとのみ呼称する。フィリンゲン-シュヴェニンゲンは、現在ではバーデン・ヴュルテンベルク州の中で、フライブルク行政管区の中に位置するシュヴァルツヴァルト・パール郡の郡庁所在地である。政治的な機能だけでなく、地理的にも「黒い森」の中心に位置していると言える。現在の人口は約82000人とされているが、かつて作られた城壁の外に市街地が拡張され、また、シュヴェニンゲンと合併して以降の人口である。ファストナハトの舞台となる旧市街地は現在の行政区画と比較するとはるかに小規模で、東西に1 km、南北に2 kmの楕円形の城壁に囲まれている内側に限られる。http://www.villingen-schwenningen.de/tourismus/ueberblick.html, 2012年9月参照。

える。このとき、ファストナハトは儀式的側面が強化され、逆に娯楽としての側面が強かったパレードが実質的にファストナハトの主役の座を退くことになるという変化が起きた。こうしてファストナハトは、戦後間もない頃に起きた変化によって、ドイツ国内にある様々な謝肉祭の中でも「伝統的」な儀礼という特色を持つことになり、今日開催されている形になった。

ところで、フィリンゲンを調査対象として挙げた理由だが、それはこの都市がファストナハト文化圏の中心地としてシュヴァーベン地方の人々に認知されており、ファストナハトの歴史が明確で資料も豊富なためである。例を挙げると、第2章で紹介するフィッシャーの著作はファストナハトに関する文献としては史上初であり⁵⁾、また、その著作が刊行された1922年から2年後の1924年には、シュヴァーベン地方の各都市が連携してファストナハトを振興する団体「シュヴァーベン・アレマン道化組合連盟」(Vereinigung Schwäbisch-Alemannischer Narrenzünfte) が結成され、フィリンゲンが初代盟主に選出された⁶⁾。

第1章 2011年3月のファストナハトについての報告

1. 1 ファストナハト開催の時期

21世紀に入ってから、フィリンゲン市では慣習に則り、毎年のように2月から3月の間に約1週間、ファストナハトが開催される。具体的な開催時期は、カトリックの教会暦による「四旬節」(Quadragesima)つまり「断食期間」(Fastenzeit)の前の1週間、と現在でも決められている。断食期間は、日本ではイースターとも呼ばれる「復活祭」(Ostern)を終了日として行われるが、復活祭が年度ごとに移動する移動祝祭日であるため、断食期間も移動し、その結果ファストナハトも年度ごとに開催時期が異なる(図1参照)。復活祭は、春分の日後の来る最初の満月の日の直後の日曜日に実施される。つまり、春分の日から満月までの期間と、満月から日曜日までの2つの期間が年によって変動することになる。よって、復活祭の日程は最大で1ヶ月は差が生じるため、それに応じて断食期間、そしてファストナハトも移動することになる。これから例として挙げる2011年は、ファストナハトが3月初旬に開催された。

5) Historische Narrozunft Villingen 1584 e.V. (Hrsg.) : Masquera –die historische Villingener Fasnet Erschienen aus Anlass des 125. Jubiläums der Historischen Narrozunft Villingen 2007. Werk zwei Print + Medien Konstanz GmbH, Konstanz 2007 (以下HNV: 2007.と略称。本文中では『マスケラ』と呼ぶ), S. 62.

6) VSN: 1999. S. 20.

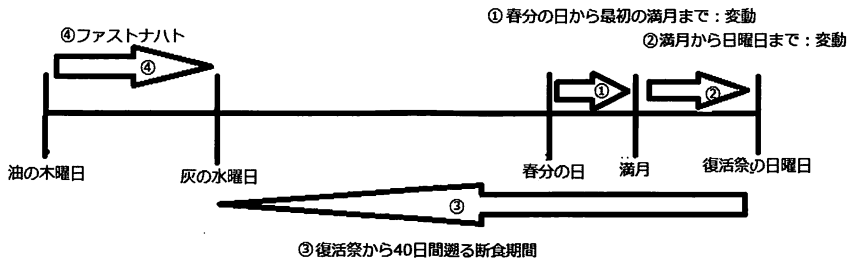


図1：ファストナハト開催日程の仕組み

1. 2 ファストナハトに参加する団体

現代のフィリンゲンでは、ファストナハトについての情報は主催する「道化組合」(Narrozunft) のホームページや街頭のポスターなど、様々な媒体で見ることができる。しかし、フィリンゲンの場合、ファストナハトには様々な団体が参加し、ホームページやポスターはそれぞれの団体が思い思いに作成するため、これらに記載されている情報には偏りがある。つまり、フィリンゲンでのファストナハトとは単一の行事ではなく、期間中に様々な団体が様々な行事を実施し、それらを総合してファストナハトと称していると言える。そこでまず、ファストナハトに参加している団体を分類し、その性質を把握していくことにする。

ファストナハトに参加する団体は、大きく分けて3種類のグループに分類することができる。この分類は諸団体の活動を観察して得られたものであり、公式にこのような区分がされているわけではない。この分類は暫定的なもので、実際には、それぞれのグループの中間にあるような団体も存在する。

しかし、この分類は、単に現在、人々がどのような形でファストナハトに参加しているかを区別するだけのものではない。この分類そのものがある種の階層差となってファストナハトに影響を与えていることが、通史から浮かび上がってくるのだ。

第1のグループは、歴史的道化組合 (Historische Narrozunft Villingen 1584 e.V.) と呼ばれる (図2参照)。この団体は、昔ながらの衣装を身につけ、「伝統的」な木彫りの仮面を着用する者もいる点が最大の特徴で、フィリンゲンのファストナハトを象徴する存在となっている。特に、この団体のトップである道化組合長 (Zunftmeister) は、祭りの期間中は儀式を通じてフィリンゲン市長と対等の存在となり、祝祭空間と化した街の頂点に立つことになる。

また、実務面では独自のアーカイブを設置して郷土史を研究することも使命としている。その結果、フィリンゲンのファストナハトについての主要な情報源ともなっている。ゆえに、フィリンゲンのファストナハトを紹介する際には、現在ではこの歴史的道化組合が中心になることが多く、それ以外の団体については関心が向けられることが少ない。だが実際には、ファストナハトはこの歴史的道化組合だけで全てを運営しているのではな



図2：第1グループ「歴史的道化組合」



図3：第2グループのうちのひとつ
「猫音楽」

ような化粧をした、どちらかと言うとケルンのカーネヴァルに近い装束である。彼らは様々な点でフィリンゲンの「伝統的」な道化達と方向性の異なる団体である。例えば仮面をかぶらず化粧をする、団体名がZunftではなくGildeとなっている、方言のObedではなく標準語のAbendという名称で演芸大会（後述）を開催するなど、違いが徹底されている。この第2グループが第1グループと協力関係にあるのは当然としても、あくまで歴史的道化組合とは別の存在である。これらの集団は、第1グループよりも高い頻度でファストナハトの行事に登場し、行事を実際に進行させている。そういう意味で、祝祭にとっての重要性は第1グループに勝るとも劣らない。

そして第3のグループは、上記以外の集団である（図4参照）。第1、第2グループよりも小規模の団体が多いが、逆に、団体の数は最も多い。共通した特徴は2点ある。1点目

い。特に、ファストナハトの中でも重要な儀式は、後述する第2のグループと分担して実施している。一見すると、フィリンゲンではいかにも木彫りの仮面と古風な装束の集団だけが古色蒼然とした儀式を行っているように見える。しかし、実際には古風な装束以外の人々も多数参加しているのだ。

第2グループには、ファストナハトで行われる儀式の進行を司る団体が挙げられる（図3参照）。ここには「猫音楽」（Katzenmusik）、

「グロンキ・ギルド」（Glonkigilde）、そして3mの鞭を振り回して音を立てる黒装束の集団「シャンツェルの組合」（Schanzel-Zunft）といった団体が分類される。

団体ごとに統一した衣装を用意しているものの、肝心の木彫りの仮面と古風な衣装をまとってはいない。

例えば、猫音楽は猫の着ぐるみを代表者に立て、プロイセン風の軍服のパロディのような衣装に身を包んだ男女が付き従う。そして、太鼓とラッパを使用した音楽を奏でながら行進する。

また、グロンキ・ギルドはナイトキャップと寝巻き、素顔に白、赤、青の3色でピエロのよ



図4：第3グループのうちの1団体
「南町ピエロ」

は、それぞれの団体ごとに統一した仮装をしていること、2点目はファストナハトの儀式で何らかの役割を演じることはなく、主にパレードが活躍の場であることだ。悪く言えば便乗して騒いでいる雑多な集団であり、あり合わせの日用品で作った仮装や現代的な仮装など独創性のあるものもあれば、逆にコメディア・デラルテ様式そのままの装束もある。他方で、地名や職種などにちなんだ仮装をしている集団もいる。旬のニュースを取り扱う団体もいたが、ケレンのように時事問題を風刺する山車などは用いられない。また、他の地域でファストナハトを主催している団体が、自前の木彫りの仮面と衣装を身にまとして応援に駆けつけることがある。こうした諸団体の構成（図5参照）や活動については、これまで当事者間以外ではほとんど話題に昇らず、関心が向けられてこな

かった。例えば、この階層性はフィリンゲン住民の社会的地位と関連している可能性があるが、そうした事例はまだ報告されていない。観光客や研究者など外部の人々に向けてファストナハトが発信する情報は、第1グループである歴史的道化組合についてのものが基本であり、それは外部の人々がフィリンゲンのファストナハトに対して求めている要素でもあるからだ。しかし、これから概観する19世紀以降、第2次世界大戦までのファストナハトで

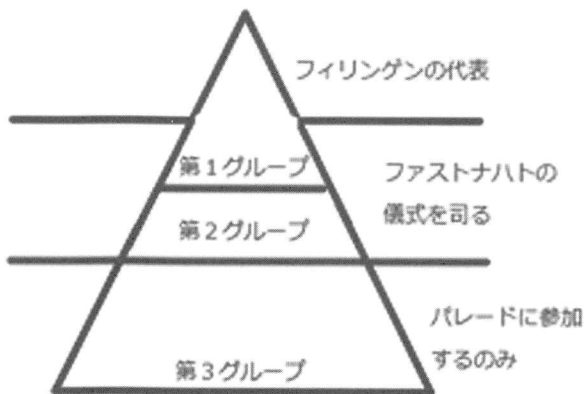


図5：2011年における参加団体の階層性

は、実はこの雑多な第3グループこそがフィリンゲンのファストナハトにおいて大きな役割を担っていたのではないかと考えられる。そして、このグループが戦後に影響力を失うことで、ファストナハトは現在行われている「伝統的」な祝祭へと形式を整えていったことになる。

1. 3 ファストナハトで実施される行事

しかし、登場する団体を確認しただけでは、19世紀のファストナハトに目を向けるには不十分である。そこで、現在におけるファストナハト全体の進行を確認し、過去へと溯

りたい。

フィリンゲン市が発行する観光用の冊子⁷⁾によると、ファストナハトの行事は「舞踏会」(Ball)、「ファスナハト」(Fasnacht)、「パレード」(Umzug)、「伝統」(Tradition)⁸⁾の4種類に分類されている。この分類は、本来であれば「演劇」(Theater)や「講演」(Vortrag)など、イベントの種類を表記するためのものだが、ここもファストナハト中は特別仕様となっている。

さて、本稿の焦点はあくまでパレードと儀式だが、ファストナハトの全体像をつかむために、ここで、分類された各行事の内容を簡単に確認しておこう。

水曜日から土曜日にかけて、フィリンゲンで実施されるのは「舞踏会」(Ball)である。「舞踏会」という行事は19世紀の記録にも登場しており、ファストナハトに関係するキーワードの中でも頻度の高いものである。ウィーンなどでは「謝肉祭の舞踏会」と言えば、上流階級の紳士淑女が現在でも着飾って仮面舞踏会に参加している。しかし、今日ではケルンのカーネヴァルやファストナハトでは、„Ball“とはこうした舞踏会のことではない。ケルンなどでは今日、ホール内で催される演芸大会を「舞踏会」と称しており、様々なコントや音楽演奏などが催される。フィリンゲンの場合もこれになっている。会場となるホールには、演芸用の舞台とともに縦長のテーブルが並べられ、出演者以外は着席して食事をとることができるようになっている。テーブルの配置から見ると、晩餐会と呼んでもかまわないだろう。ケルンではテレビで中継され、プロのミュージシャンも参加するものとなっているが、フィリンゲンではあくまで市民が演じ、楽しむものになっている。ただし、演芸大会を催しているのはあくまで現代の話であり、19世紀の絵画を確認すると、ケルンでも語義通り舞踏会が開催されていたようである⁹⁾。

主催する団体ごとに見てゆくと、歴史的道化組合に所属する女性、グロンキ・ギルド、第3グループの諸団体が「舞踏会」を催していることがわかる。ちなみに、最初の「舞踏会」は男子禁制であり、「オールドミス夕べ」(Altjungferenabend)と名付けられている。これは、字面通りに受け止めた場合、「未婚のまま年齢を重ねた女性」だが、伝統的な女性の装束が「古風なフィリンゲン女性」(Altvillingerin)とも呼ばれているので、2重の意

7) 前述の通り、ファストナハトについての情報は、各団体が発信するものだけでは偏りが出てしまう。そこで、全体像を確認する手段としては、フィリンゲン市の観光局が発行するイベント案内の小冊子(Veranstaltungskalender)がある。この小冊子は本来は毎月発行されるものだが、ファストナハトの時期だけ特別な紙面で掲載するなど、市の行政側も祭を振興させようという工夫が見られる。

8) この「伝統」(Tradition)という行事名だが、これは厳密にはファストナハトが終了したあとの行事で、パンフレット上には1つだけ記載されている。この行事は、街中の飲食店で一斉にエスカルゴ料理がメニューに並ぶ、というものである。これは、断食期間に食べる魚料理の代わりと考えられる。フィリンゲン近郊は大きな川がなく、良い漁場がないことが原因ではないだろうか。ファストナハトとエスカルゴはこの地方では緊密な関係にあり、フィリンゲン近郊で最も古くからファストナハトを行なっているとされるエルツァッハ(Elzach)という都市では、人々は頭部一面にエスカルゴのカラーを貼り付けた道化の仮面をかぶっているVSAN: 2007, S.84-85.

9) Euler-Schmidt, Michael / Leifeld, Marcus / Festkomitee des Kölner Karnevals von 1823 e.V. (Hrsg.): Der Kölner Rosenmontagszug 1823-1945. J. P. Bachem Verlag, Köln 2007. S. 20, 121.

味があるのではないかではないかと考えられる。「オールドミス夕べ」とは女性達だけで行われる晩餐会で、19世紀風のドレスあるいは「古風なフィリンゲン女性」の装束を身に着けた女性達が参加する。

フィリンゲンの様々な団体が各自で「舞踏会」を開いた後には、「ファスナハト」(Fasnacht) と呼ばれる行事がパンフレットに並ぶ。パンフレットの分類では「ファスナハト」は様々な儀式の総称である。つまり、現在のフィリンゲンでは「ファストナハト」あるいは「ファスナハト」とは、祝祭そのものを指していると同時に、「伝統的」な儀式の呼び名でもある。すくなくともフィリンゲンでは、ただ仮装をして騒ぐだけではファストナハトではないと言える。

このカテゴリーに分類される行事は、主に日曜日から開始され、火曜日まで続く。

日曜日がファストナハトの中核をなしているが、それに先立って木曜日から路上では数十人に分かれた小集団が、それぞれ独自にパフォーマンスを行う。太鼓と金管楽器で騒々しく音楽をかき鳴らし、あるいは鞭を振り回して音を鳴らし、またあるいは飲食店や商店を訪問し、音楽を演奏し独特の所作を行う。

こうしたパフォーマンスは、ファストナハト期間中は毎日行われる。さらに、毎朝6時に開始して、途中で他のイベントや行事を挟みつつ、深夜0時まで続く。

それとは別に、日曜日にファストナハトを開始させる意味を持つ象徴的儀礼が行われる。まず、道化たちは旧市街地を取り囲む城壁の中に閉じ込められているという、雄猫(着ぐるみ)を塔から解放する。次に、市庁舎に集まった道化たちは、フィリンゲン市長と方言で押し問答をした後、市長から市の行政権を象徴する「鍵」を奪い取る。その後、コンサートホールで上記の演芸大会が再び行われる。そして最も夜遅くに行われる「ファスナハト探し」(Fastnachtsuche) という行事は、グロンキ・ギルドが旧市街地の塔から「ファスナハト」なる実体のないものを探し出し、ファストナハトの開催を宣言する。

主導する団体で見ると、塔から雄猫を解放し、演芸大会を主催するのが猫音楽で、市長から鍵を奪取するのが歴史的道化組合、実体のない「ファスナハト」を探すのがグロンキ・ギルドとなる。

逆に、火曜日の深夜にはファストナハトの終了を意味する行事が実施される。まず、街中を逃げ回る雄猫を捕まえて塔に閉じ込めると、次に市庁舎に集まり、市長に鍵を返却する。そして「ヴェシュト」(Wuescht)¹⁰⁾ という名の集団が、自分の衣装に詰め込まれた藁を体から取り出し、市庁舎前の広場に積み上げ、火を点けて燃やす。これらのうち雄猫を捕獲する役目を負うのが猫音楽で、その後の行事を歴史的道化組合が執り行う。

小冊子の分類では、「舞踏会」「ファスナハト」とは別に、月曜日、火曜日には「パレー

10) ヴェシュトは、フィリンゲンの「伝統的」な仮面と衣装で、歴史的道化組合に所属している集団である。最大の特徴は、衣装の中に藁を詰め込んで着膨れしている点である。この着膨れは、かつてヴェシュトを投石で追い払うという行事があった際に、安全のために用意されたと言われている。Zimmermann, Michael / Joseph, Heinrich: Der Villingener Wuescht. Stadtarchiv Villingen-Schwenningen. 1999, S.7.

ド」(Umzug)が行われる。これは名前の通り、旧市街地を練り歩く行事である。それぞれの団体が、団体ごとに仮装をする他、トラクターや耕運機の荷台を改造した山車を引き連れることが多い。

現在では様々な団体がパレードを挙行している。団体の枠を越えて子供達を中心となるもの、歴史的道化組合が主催するもの、グロンキ・ギルドが主催するもの、第3グループの諸団体が中心となるものが存在する。しかし、結局のところ、どのパレードでも参加する人々はあまり変わらない。例えば子供達のパレードには大人が同伴するし、逆に他のパレードにも子供は参加している。また、主催する団体が変わっても、同行する団体が増加し、結局は見た目が変わらないパレードが何度も行われることになる。パレードの内容としても、現代では旧市街地を練り歩くのみの行事である。

しかし、ファストナハトの歴史を紐解くと、このパレードは19世紀に開始され、20世紀に至る変遷の影響を受け続けてきた行事なのである。そして、今日の見たと裏腹に、「ファストナハト」と呼ばれている儀式的な行事のうちかなりの部分が1950年代に新しく開始された。では、これはいかなる意味を持った現象なのか。いよいよ時代を遡ることにする。

第2章 19世紀から20世紀初頭のファストナハトのパレード

2. 1 『フィリンゲンのファストナハト今昔』の報告

19世紀中盤から20世紀前半に開催されたファストナハトについて、この祭がどのような変遷を遂げたかは、アルバート・フィッシャーが1922年に出版した『フィリンゲンのファストナハト今昔』(„Villinger Fastnacht von einst und heute“)が有力な証言となる。フィッシャーはこの冊子を出版した後1927年にフィリンゲンの道化組合の長(Narrozunftmeister)に就任し、第二次世界大戦後までフィリンゲンのファストナハトを担う中心的人物であった。彼が1922年に出版したこの書籍は、近現代のフィリンゲンのファストナハトについて書かれた最初のものであった。この著作においてフィッシャーは事実を簡潔に記録し、彼自身の主張はできる限り控えている。彼自身による解釈や考察などはあまり記されていないが、その代わり、政治的な混乱や経済的な困窮によりファストナハトの開催が困難な年度があったことなど、ファストナハトの宣伝や普及について必ずしもプラスには働かない情報も記述している。第3章で後述することになるが、フィッシャーの姿勢は当時の民俗学研究の趨勢から見ると必ずしも一般的ではなく、むしろ少数派と言える。フィッシャーは元々鉄道機関士であり、あくまで実務家としてファストナハトに関わっていたのだろう。とは言え、フィッシャーの見解は全く記されていない、とまでは言い切れない。箇所によって、記述の量に大きく差があるのである。フィッシャーが収集していた資料に偏りがあったからか、あるいは、彼が重要視していたから記述の量が増えたかの、どちらかだと考えられる。分量が多い年度はファストナハトに大きく変化が生

じているので、彼がそれらの年度を重要視していた証拠と捉えられるだろう。

『フィリンゲンのファストナハト今昔』はA5版で全100頁、目次は付けられていないが全体は6章から成っている。ここではパレードに焦点を当てた第3章「ファストナハトのパレード」(Die Fastnachtumzüge)を中心に紹介していく。

第3章はパレードの変遷を時系列に沿って記述している。フィッシャーは其中でも特に3つの年をターニングポイントと見なしていたと考えられ、他の開催年を圧倒する分量で紹介している。その最初の年は1843年で、フィッシャーはそれ以前のファストナハトの様子をごく簡潔にまとめるのみにとどめている。

2. 2 1843年のパレード

フィッシャーによれば、1843年にフィリンゲンのファストナハトでは初めて組織的なパレードが開催された。パレードを実行する中心となったのはフィリンゲン在住のオイゲン・ナイディングー (Eugen Neidinger) という馬車職人だった。彼は遍歴修行で立ち寄ったドイツ、オーストリア諸都市¹¹⁾の謝肉祭を見て以来、その魅力を故郷にもたらそうとし、1840年から個人的にパレードを開催していた。それが賛同者を徐々に得て、1843年に初めて街を挙げてのイベントになったのである。フィッシャーは当時の地元紙に掲載されたファストナハト開催の告知を引用してその様子を紹介している。その新聞広告は「司教教書」(Hirtenbrief)¹²⁾のパロディという体裁を取っており、その名も「道化司教教書」(Narrenhirtenbrief) というものだった。「父なるバッカスによる祝祭的なパレード」(Festlicher Einzug des Vaters Bacchus) という題で、序章と5つの章に分けられ、祭の内容を細かく予告すると同時に、祭が始まる前から、祭りを盛り上げる雰囲気を作り出そうとしているようだった。

以下、その厳かにして滑稽な道化司教教書からパレードに関する部分を抜粋して挙げる。

-
- 11) フィッシャーは、ナイディングーが具体的にどの都市を訪れたかは記していない。フィリンゲンの道化組合が出版したHNV: 2007.ではナイディングーについての記述そのものが見当たらないなど、現時点では都市の特定はできていない。ナイディングー1人だけの力でパレードが実行されたとは当然思えないので、これは半ば伝説化した話だと考えるべきかもしれない。
- 12) 司教教書とは、カトリックの司教が教区の聖職者または信徒に対し、教導のために発する公的書簡であり、教区内における教会の機関誌のような性格を持っている。定期的に発行されるものと不定期のものがあり、信仰や生活に関する諸注意などから、社会、政治問題まで様々な分野の内容が取り上げられる。特に、カーネヴァルやファストナハトが行われる地域では、この時期には、四旬節開始の告知や、四旬節の間に節度ある生活を過ごすための教えなどを記した司教教書を必ず発行することになっている。司教教書はしたがってパロディの対象となる権威であったと同時に、ファストナハトを連想させる風物詩でもあったのだろう。また実際の司教教書は、一般信徒向けのものであっても、細かな章立てをして非常に厳密な書式で仔細に記述される文書である。これをパロディ化することで、現実の秩序のもつ価値観を転倒させると同時に、秩序ある慣習として祝祭を構造化することが出来たと言えるかもしれない。

まず、先に挙げた題「父なるバッカスによる祝祭的なパレード」についてだが、これがこの年のファストナハットの「モットー」(Motto)であった。モットーとは、ファストナハットやカーネヴァルに毎年つけられる標語のようなものである。ファストナハットやカーネヴァルの参加者は、その年のモットーに沿った仮装や山車を用意することになる。ケルンでは1923年に最初に組織的に開催された際に、モットーが用意された。フィリンゲンもケルンの影響を受けてモットーを用意したと思われる。

ファストナハットは、モットーを掲げることによって、何らかの方向性を持って実施される祝祭になっていたと言える。そして、パレードの実施とモットーの出現が同時であったことから、パレードは、そのモットーを最も端的に表現するための媒体として機能していたと考えられる。これは、フィリンゲンのファストナハットでパレードが初めて行われたのが1843年、とフィッシャーが詳細に記述した理由でもあると言える。

パレードが開催されたのは、月曜日と火曜日だった。まずパレードの1日目は「女神ルナの祭」(Fest der Göttin Luna)と呼ばれていた。日程は書かれていないが、順番が「主日の次の日」で、「女神ルナ」が月の女神であることから、月曜日を仰々しく言い換えていることがわかる。今日のように「ファストナハットの月曜日」(Fastnachtmontag)や「バラの月曜日」(Rosenmontag)とは呼ばれていない。前日は夕方から宴会があったが、この日は朝8時から酒場に集合し、宴会が始まった。次に正午から普段は市が開かれる広場に集合し、今度は屋外での宴会が開かれた。

朝、昼と飲み食いをした後、ようやくパレードが行われた。山車の上に用意された玉座に「父なるバッカス」(Vater Bacchus)が鎮座し、元帥や大臣と呼ばれるやんごとなき方々が列をなして行進した。おそらく「父なるバッカス」がパレードの支配者で、家来が付き従っていたのだろう。行列の後には「イタリアオペラ」なるものが上演された。演目は記録されていない。上演場所は路上だったようで、辻音楽師の出演なども記述されている。そのため、「イタリアオペラ」と名乗っていても実際は何か別のものかもしれない。こういった催し物は夜遅くまで続けられた。

その翌日は「戦神の祭」(Fest des Kriegsgottes)が開催された。順番から考えれば火曜日のことを指しているのだが、ルナやバッカスと同様にローマ神話の「マルス」をイメージしているのではないかと考えられる。今日では「ファストナハットの火曜日」(Fastnachtdienstag)と呼ばれているが、ここではまだその名称は使われていない。この日は命名の通り、祝砲により祭が幕を開けた。このように大掛かりな仕掛けは、フィリンゲンの行政側と市民が歩調をそろえてファストナハットを開催していたことを推測させる。

正午から午後1時にかけて、前日とは異なり、今度は狩人と動物たちの扮装をしたパレードが行われる。このパレードは狩人による狩猟祭のような趣があるが、参加している動物の種類を見ると、狩猟祭とも言い切れない。フィッシャーが記録している動物のうち、狼、熊、ウサギは十分に「野生動物」と呼べるが、その他は雄牛、ロバ、羊、ガチョウ、鶏と書かれており、「狩人」という趣旨に沿っているかどうか不明である。ちなみに、フィッシャーの記述にはすべて「動物」としか記されていないので、本物の家畜が登場した

可能性もある。この動物達を狩人が猟銃の空砲で仕留めていく、という趣向だったらしい。

夜は再び宴会が催されたが、深夜0時、つまり「灰の水曜日」(Aschermittwoch)の始まりまでとされた。祭が終了するタイミングは今日でも変わらない。

こうした祭りの進行を見ると、既に19世紀半ばの時点で祭の形式は出来上がっていたと言えるだろう。

一方で、月曜日をルナ神の祭、火曜日を戦神の祭、さらに水曜日を「盗賊と職人を守護する足に羽の生えた神の祭」(Fest des an den Füßen geflügelten Gottes der Diebe und Handelsleute)¹³⁾と呼び、火曜日のパレードの中心となるのが父なるバックスとその家臣たちである、など名前の付け方の元となるのはギリシア・ローマ神話だった。この時点では、まだ「ドイツ的なもの」は祭りの要素として重要視されていなかったと言える。

フィッシャーが挙げる次のターニングポイントは1882年であるが、その途中の年月についてはごく簡潔に述べている。1843年に大々的にパレードを行ったものの、その後しばらくはパレードを行うという祭りの形式が定着しなかったようである。フィッシャーによると、パレードを行うには金銭面での負担が大きいため、特に財政的に厳しい年はパレードを行わずに「謝肉祭劇」(Fastnachtspiel)¹⁴⁾と称して演劇や大道芸を招致するほうが費用の節約になったようである。確かに、1843年の道化司教書からは、夜中まで明かりをつけて野外で宴会を行うなど、非常に豪華な様子がわかる。この時代では、夜中まで明かりを燈すと言っても、現代のように簡単にはいかなかっただろう。

1870年代以降、パレードを整備して実施しようとの機運が徐々に高まる。1880年代にはパレードの実行委員会も発足し、パレードの質、量の向上に努めることになる。また、パレードを開催する際に、1843年に掲げられたモットーを毎年設定し、それに従った仮装や山車を準備するようになった。

そして、1870年代からドイツが対外戦争で成果を挙げ始めると、それに応じて国威発揚の機運が高まった。掲げられるモットーの内容に、戦勝の凱旋を模したパレードや敵国フランスを揶揄するような出し物が見られるようになったのである。例えば、1881年には「ルイ・ナポレオンによるズルー族居住地への行幸」(Die Reise des Prinzen Louis Napoleon zu den Zulus)というモットーが掲げられた。フランスの王太子ルイ・ナポレオ

13) 特徴から考えると、いわゆるヘルメス神のことだと思われる。

14) フィッシャーはFastnachtspielと名づけた出し物を何度か紹介しているが、それは中世の「謝肉祭劇」のことではなく、ファストナハトで行われる催し物全てを指している。1843年から1882年までフィリンゲンで行われたFastnachtspielには様々な内容のものがあった。シラーの戯曲などの(少なくとも題名は)まっとうな戯曲のような劇もあれば、流しの旅芸人による曲芸もあった。さらに、歴史を再構成するイベントが行われた1882年に関しては、祭の全体を指してFastnachtspielと呼んでいる。フィッシャーは当然のようにこの語を用いているが、ここでいくつかの疑問が生じてくる。例えば、これらがどの程度まで、一般的に言われている謝肉祭劇に近いものなのか。あるいは、Spielという語の多義性から推測されるように、劇や戯曲の枠を越えたものだったのか。また、「創られた伝統」という視点から見たら、ファストナハトの中世からの連続性を強調するためにこの語を使用しているのではないか。

ンがアフリカに出かけ、現地住民におびえる情景を山車や仮装にした。隣国フランスを茶化して楽しんでこの趣向は、この次の年に決定的なものとなる。

3. 3 1882年の大パレード

1882年のパレードは、国威発揚に加え「郷土史的」(lokalhistorisch) な要素をファストナハトパレードの中心に据えることによって、その後の方向性を決定付けた年と考えられる。この年のモットーは「1704年のタラール將軍率いるフランス軍によるフィリンゲン包囲」(Die Belagerung der Stadt Villingen durch die Franzosen unter Marschall Tallard im Jahre 1704) というタイトルだった。1704年にフランス軍がフィリンゲン市に侵攻し街を占領した故事を旧市街と城壁を用いて再現する、というものであった。新聞紙上に掲載されたファストナハト開催の告知は、フランス軍に対抗するために市の守備隊司令官と名乗る人物が発した「軍人服務規程」(Kriegsartikel)¹⁵⁾ のパロディという体裁であった。以下、この年に行われた「謝肉祭劇」の概略を記す。この年はフィリンゲンで行われる行事すべてが「謝肉祭劇」だったことになる。フィッシャーの筆の運びを見る限りでは、フィリンゲンがまるで1704年にタイムスリップし、再び当時の戦闘を開始したかのような臨場感だったようである。

この年にイベントが行われたのは例年よりも遅く、火曜日の午前11時だった。このとき、フランスとの国境がある西側から砲声が鳴り響き、戦端が開かれた。

「フランス人が来るぞ! (D' Franzose kummel!)」という叫び声が約200年ぶりにあがったが、市民はかつてとは異なり、逃げ出すのではなく旧市街に集まってきた。砲声がやんだ後、楽団の行進曲とともにフランス軍の格好をした人々がパレードを行った。パレードの出発点は旧市街を囲む城壁にある門だった。城壁で囲まれた旧市街は、以前からファストナハトの舞台となっていたが、広場や酒場など特定の場所に限られていた。この年のパレードによって、旧市街全体が祭の舞台になっていたことがわかる。

さて、タラール將軍率いるフランス軍は史実ではフィリンゲン市を占拠することが出来たが、今回はよく訓練された市民による防衛側に分があった、ということになった。市民たちは旧市街の城壁を利用してフランス軍を迎撃し、砲弾の雨を降らせて敵を潰走させた、という内容に歴史は改変された。ちなみに、この改変はフィッシャーも指摘している。これは、彼のファストナハトに対する客観的な姿勢を示していると言えよう。

攻めあぐねたタラール將軍は、史実とは逆に和睦を結ぼうとし、市庁舎に和平の使者を派遣した。しかし、使者は予めフィリンゲン市側をだますよう言い含められていたので、

15) 街を防衛するために避難訓練や食糧の備蓄など様々な事前準備を行うという名目で新聞紙上に告知された。これも細かな箇条書きで「敵の口の中に入らぬよう、パンやソーセージは通常の3倍の大きさで作ること」などの指示を与えていた。こうして作られた特製の食材はファストナハトのご馳走となった。司教教書と同じく、権威のパロディ化であると同時に、馬鹿馬鹿しい内容を付け加えることによって、祭の運営のために発する指示そのものを祭の雰囲気づくりに貢献させつつ、指示を浸透させようとしていることが窺える。

非常にぎごちなく怪しげな挙動で和平交渉に当たった。市民側はタラール将軍の企みを見抜き、逆に使者を宴会で大いに歓待して油断させ、和平交渉を成功させたのだった。その後、正式に和睦が成立し、盛大なパレードと和睦の宴会が開かれた。

フランス軍の侵攻から停戦、和睦の一連の流れの中に、パレード、寸劇、宴会といったファストナハトに必要なイベントを巧みに落とし込んだ構成がこの年の特徴であった。

対フランス戦闘を題材にとり、さらに史実とは勝敗を逆転させるなど、国威発揚のナショナルリズムと郷土史が結びついた祭は非常に好評で、翌1883年も同じ内容で祭りが挙行された。1883年はこれまでにない観客動員数だった。のちに1904年にもう一度同じ演目が挙行された。

これ以降、郷土史を題材にしたパレードと、アメリカ事情やドイツのアフリカ侵攻など国際的な話題を取り入れたパレードを1年ごとに交互に実施することになる。次のターニングポイントとなる1910年までの間、ファストナハトは4回中止されたのみだった。

2. 4 1910年、1912年、1914年の大パレード

フィッシャーが挙げる第3のターニングポイントは1910年、12年、14年の3年である。これらの年の特色として、これまでの郷土史とドイツ全体の歴史の間にあるようなモットーでパレードを開催すると同時に、規模がこれまで以上に大きくなったことが挙げられている。内容面に関して一言で言えば、文芸路線へと転向した。

まず1910年の祭はモットーを「目で見るドイツ民謡」(Das deutsche Volkslied im Bild)と題し、中世の著名な吟遊詩人たちや、ローレライなどの詩歌をモチーフにした仮装と山車が登場した。参加団体や人数が拡大し、パレードが2部構成になったが、2部への分割は規模拡大だけが理由で、それぞれの部は内容的には差が無かった。

こうして、ドイツ的な古典文芸を視覚化する試みは好評を博し、今後のファストナハトのフォーマットとして受け入れられることになる。しかし、あまりに大規模になったために隔年での実施となり、11年、13年はモットーなしの仮装行列のみとなってしまった。パレード実行委員会の中に財政に明るい人間がいなかったことにも原因があるとフィッシャーは述べている。

1912年はゲーテとシラーの作品をモチーフとした仮装や山車が街に繰り出したが、この年はモットーとされるものが2種類確認できる。フィッシャーが伝えるモットーは「耳で聞き目で楽しむシラーとゲーテとその作品」(Schiller und Goethe und ihre Werke in Wort und Bild)だった。一方で、街に張り出されたファストナハト開催告知用のポスターには「ドイツの文豪シラーとゲーテ」(Deutsche Dichturfürsten Schiller und Goethe)と書かれていた。フィッシャーが伝えるパレードの内容とポスターに書かれたパレードの内容は同じもののため、2種類用意されていたか、フィッシャーの記憶違いかどちらかだろう。なお、シラーの方がシュヴァーベンと縁が深いため、モットーではそちらが先になっていると考えられる。

1910年よりさらに参加者の規模は拡大し、同じく2部に分けることになった。ゲーテとシラーはセットにはなっているものの、山車の題材にはシラーの戯曲作品のほうが作りやすかったようで、ゲーテ関係のものが9点、シラー関係が10点と、シラーの山車のほうが若干多かった。なお1910年と同様に、第1部と第2部に内容の差はなかった。

「伝説とメルヒェン」(Sagen und Märchen)というモットーで開催された1914年は参加規模が3回のうち最大となった。この年の様子は、特に目新しいものがなかったか、あるいは資料不足のためか、フィッシャーは詳しく述べていない。

しかし1914年7月の第1次世界大戦勃発後は、ファストナハトは中止されてしまう。フィッシャーは、戦後の1920年になって早速ファストナハトのパレードが行われたことに希望を見出してこの「ファストナハトのパレード」を結んでいる。

1910年、12年そして14年のパレードが2部に分かれていることにフィッシャーは特に注目し、ファストナハトへの参加者が増えて祭りが大規模になったと述べている。こうした変化は1910年以降の特色だと考えていいだろう。質的な面では、仮装の題材に教養主義的な高尚さが感じられることが挙げられる。これは、どちらかと言えば見せ物や娯楽の要素が強いファストナハトやカーネヴァルにしては注目すべき点である。

例えば、1910年には中世の吟遊詩人を、1912年にはゲーテやシラーの戯曲を題材にした山車が登場する。著名人を登場させるパレードは1910年に突然出現したものではなく、1870年代から現れており、その延長線上にある現象だと言える。

本来、教養と見なされる文学が見世物になった、という点では、いわゆるキッチュな出し物だといえるかもしれない。ナチスによる政権掌握以前の1920年代から、当時の民俗学研究者がゲルマンの古習俗を背景にしてファストナハトを称え、地域住民を啓蒙する論を展開していたことと重ね合わせると、「高尚さ」を求めるファストナハト主催者側の姿勢には、次のナチ時代に体制へと取り込まれる危険を、もともとこの時点で孕んでいたと言えよう。

2. 5 3つの年代における祭の変遷

フィッシャーが目にした3つの年代の様子から、フィリンゲンのファストナハトの変化を段階的に捉えることができるだろう。

まず1843年にフィリンゲンのファストナハトは形式面で整ったと言える。司教教書のパロディによって告知された宴会やパレードの日程は、現在でも近い形で行われているものだ。その一方で、祭の名づけ方にローマ神話に関連するディテールが見られ、フィリンゲンのファストナハトはこの段階ではドイツ的な要素を意識していなかったと考えられる。

また、新聞での告知が司教教書のパロディだったことも注目すべき点であろう。元々定型な司教教書の形式を用いたことによって、反権威的な娯楽でありながら、それを踏まえたいうえで一定の秩序を保つことに成功したと言える。

次にフィッシャーが紙面を割いたのは1882年のファストナハトである。この年は、郷土史が取り上げられ、それが主にフランスとの戦いの再構成であった点が特徴的であった。まず、町の歴史を再現することによって、旧市街の町並みや城壁が祝祭に組み込まれた。それは、パレードによって市街そのものを祝祭空間とする効果をより促進させるものであった。フィリンゲン市の全体が祝祭に参加し、さらに自分たちの先祖を現世に呼び戻すことになる。したがって、ファストナハトはこの年に祝祭構造としてより洗練されたものになったといえる。

一方で、フランスという外敵の登場と、それを題材にしたファストナハトが好評を博し、多くの観光客を呼び込んで2度の再演までされたことから、当時の対外戦争と関連するナショナリズムの高揚を読み取ることが出来る。

こうした傾向はフィッシャーによって「郷土愛国心」(Lokalpatriotismus)と表現されているが、その要素は、フィリンゲン市の道化組合が「歴史的道化組合」(Historische Narrozunft)と名乗っていることによって継承されていると言える。ただし、フィッシャーはあくまで街のパレードに焦点を絞って筆を進め、当時の世相などには祭に直接かかわるものでない限り触れていない¹⁶⁾。

また、歴史的なパレードとは別に、外国事情を題材にしたパレードが定期的な実施されることになったのも注目すべきであろう。自分たちとは異なる存在を笑いの対象にすることもファストナハトの特徴として顕在化したのだ。

そして、ここで注意すべきは、国威発揚につながるような内容のパレードは1882年以前から始まっていて、郷土史的な題材が後からそれに結びついたということである。1882年は両者が結びついた年として非常に重要なターニングポイントであったと言える。逆に、第2次大戦以降のファストナハトでは両者は再び切り離され、郷土史の面だけが残されたことになる。国威発揚と郷土史はもともと別だった、だからこそ、切り離して片方だけ存続させることが可能だったのではないだろうか。

1910年から隔年で実施されたパレードは、郷土愛的な側面をより強調し、フィリンゲン市のみならず広くドイツ的なものを表現する方向に進んでいく。シュヴァーベン地方は1848年頃にはまだベルリンなどの政治的中枢とは反目していたが、それがより大きな枠組に合流していったことが読み取れる。このような流れは1939年のファストナハトまで続くことになる。

さて、この章を記述するためにフィッシャーの著作を参考にしてきたが、この人物が可能な限りファストナハトに絞った記述をして、ナショナリズムとの関連についても必要最小限に留めていることは、次章で重要な意味を持つてくる。これまでは、ファストナハト

16) それどころかフィッシャーは、世相の動向などを削ぎ落としているのみならず、パレードの内容を評価する文言を記載すること自体も非常に少なく、ファストナハトを記録する立場に徹している。パレードに対する評価としては、時折「華麗な」(prachtvoll)という語を用いるのみである。しかし、この語もファストナハトでは好んで用いられる形容詞であり、特別な用語ではない。つまり、「郷土愛国心」とは、ほぼ唯一、彼がパレードの内容面について言及し、批評したものと言える。

に参加しつつも祭の記録者であった彼が、1939年には道化組合長（Zunftmeister）として、決断を下す立場にいた当事者だったからだ。そして、この章で参照してきた『フィリンゲンのファストナハト今昔』の信頼性は、次章で述べる彼の立ち居振る舞いが実証していると言える。

第3章 1939年の大パレード

3. 1 ナチス政権下の謝肉祭に関するこれまでの報告

ナチス時代を扱うことがデリケートな問題であることは言うまでもないが、それでもここ10年のあいだにケルン、ウィーン、フライブルクなどでこの時代を扱った研究書が出版され、ケルン、そしてフィリンゲンでも博物館で資料展示が行われた。謝肉祭の研究書はそもそも絶対数が少ないのだが、ナチス時代を対象にすることが昨今の潮流と言える。

フィリンゲンに関しては、学術論文、地元新聞社の短期集中連載、道化組合が出版した書籍、とそれぞれ異なった媒体で1回ずつの計3回、ナチス時代のファストナハトが取り上げられてきた。その中でも特に焦点が当てられることが多いのは、戦争で中止される直前に開催された1939年のファストナハトである。

最初にナチス政権下のファストナハトを取り上げたのは1980年にウッツ・イエッグレ（Utz Jeggle）が発表した論文「第三帝国のファストナハト」（Fastnacht im Dritten Reich）^{17）}だった。イエッグレはシュヴァーベン地方の都市であるロットヴァイル（Rottweil）、フィリンゲン、ヘッヒンゲン（Hechingen）、オーバードルフ（Oberndorf）、ロットエンブルク（Rottenburg）のアーカイブに保管されていた資料を分析し、1933年から1939年に開催されたファストナハトを記述した。イエッグレは、ナチス政権誕生後わずか6年のうちにシュヴァーベンのファストナハトがナチスの影響を受けて変質していったことを驚愕と共に語っている。中でもフィリンゲンに関しては、ファストナハトのナチス化が完成の域に達した例として、1939年の大パレードを取り上げた。

しかし、いかに過去のこととは言え、フィリンゲン側にとっては「ナチス政権を礼賛したファストナハト」というレッテルは、さぞかし苦々しいものだったにちがいない。それは、負の歴史の証拠というだけではない。第2章でも見られたように、権力に対抗し世相を風刺することはファストナハトの要素の一つだった。ファストナハトを担う人々は、風刺を取り入れることで、自分たちが中世謝肉祭劇の後継者たらんとしている、と考えられる。そのファストナハトが本来、牙をむくべき全体主義を礼賛したとあっては、何とも都合の悪い事態なのだろう。そのためなのか確証はないが、ファストナハトのナチス化に対する抵抗の証拠が、地元の研究者によって提示されることになった。

17) Jeggle, Utz: Fastnacht im Dritten Reich. In: Tübinger Vereinigung für Volkskunde (hrsg.) : Narrenfreiheit, Beiträge zur Fastnachtforschung, Tübingen 1980.

まず、1994年にミヒャエル・ツインマーマン (Michael Zimmermann) が日刊紙『シュヴァルツヴェルダー・ボーテ』(Schwarzwälder Bote)¹⁸⁾ 紙上に、全4回のコラムを連載した。彼はその中でそれぞれ2回ずつ、親ナチス的な山車と反ナチス的な山車を取り上げて紹介している。このとき、1回の記事につき1枚、計4枚の写真が掲載された。連載記事内では、この写真の出典について「写真：アーカイブ・ツインマーマン」(Foto: Archiv-Zimmermann) と記述されているところから、彼が新たに発見した資料ではないかと考えられる。

次に、歴史的道化組合が2007年に結成125周年の記念に出版した『マスケラーフィリンゲンの歴史的ファストナハト。ファストナハト歴史的道化組合結成125周年記念出版』(„Masquera – Die historische Villinger Fasnet. Erschienen aus Anlass des 125. Jubiläums der Historischen Narrozunft Fastnacht“ 以下、『マスケラ』と呼ぶ)¹⁹⁾ の中でファストナハトの通史が記され、ナチス時代の様子も取り上げられている。そこで使われている写真はツインマーマンが新聞に掲載したものとは別のものである。また、1939年とは年代が多少ずれるが、1933年に製作された、道化の口に南京錠が取り付けられている形を彫り込んだ反ナチス的な木彫りの仮面の写真も掲載された²⁰⁾。

フィリンゲンでナチス政権下のファストナハトが取り上げられる場合、特に1939年がクローズアップされる理由はいくつか考えられる。40年にはファストナハトは中止されるので、39年に行われたものがナチス政権下では最後のファストナハトであったためであろう。また、他の年に比べて現存する資料が多いこともその理由の一つだろう。イエッグレもツインマーマンの記述も、二大資料とも言える1939年のファストナハトのパンフレットと、1939年2月22日付の『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』(Schwarzwälder Tagblatt) に載ったファストナハトの紹介記事を主に取り上げて論じている。また、イエッグレが39年を取り上げて論じたため、そのまま39年が話題の中心になっているという経緯もあるだろう。ツインマーマンの記事は親ナチス的な仮装や山車と共に反ナチス的なものも取り上げたため、イエッグレの「完全なナチス化」という指摘に対する反論にもなっている。しかし、ツインマーマンの場合はナチス側、反ナチス側の事例を報告するのみに留まり、それ以上の解釈は行われていない。こうしたナチス化やそれに対する抵抗は、この街のファストナハトの構造とどのように関係し、戦後にどのような影響を残したのか。次節では、1939年のパレードの構成を資料から読み取り、その特徴について解釈した上で、前章で取り上げた19世紀中盤から第1次大戦前までのパレードと比較していくことにする。

18) Schwarzwälder Boteは、現在もバーデン・ヴュルテンベルク州で発行されている日刊紙である。本稿では Schwarzwälder Tagblatt という新聞も資料として用いているが、こちらは1939年当時に発行されていた地方紙である。

19) Masqueraはフランス語で「隠れる」を意味する masquer の三人称単数単純未来形である。

20) HNV: 2007, S.77-78. 写真及び仮面は、現在は市立博物館に展示されている。口に南京錠が彫り込まれている木彫りの仮面については、ナチスに関連したものではないとする説もある(HNV:2007, S.74)。

3. 2 1939年の大パレード

1939年のファストナハトのパンフレットはA4の青い厚紙を縦折りにし、中に黄色の1枚の縦長の紙を挟んだ全6ページのものでできている。そこにはファストナハトのイベントが順を追って掲載されていて、それによると1939年のファストナハトは2月16日の木曜日に始まっている。ここで見られる行事は、2011年のものと共通する名前が多い。おそらく同じような行事だったとみていいだろう。

この日は午後2時から「子供大パレード」(Großer Kinder-Umzug)が行われた。子供が中心となるパレードである。その最後には「コンサートホール」(Tonhalle)で「子供舞踏会」(Kinderball)が開催されると記されている。同じ木曜日には夕方に「オールドミスの夕べ」、夜8時からはコンサートホールで「グロンキの夕べ」が開催された。木曜の次に記載されているイベントは日曜日(2月19日)の日没後で、グロンキ・ギルドによる「ファストナハト探し」が行われている。現在では街を日常の世界からファストナハトの世界へと転換させる様々な儀式が日曜日に行われるが、1939年のパンフレットにはグロンキ・ギルドの「ファストナハト探し」しか記載されていない。儀式が増加するのは戦後になってからである。

月曜日(2月20日)には、朝6時に猫音楽とグロンキ・ギルドが旧市街の通りを練り歩き、太鼓によって街の人々をたたき起こした。これも現在まで続いている慣習である。その後、8時半には猫音楽が、9時には歴史的道化組合がパレードを行った。この日の目玉となったのは午後2時半からの「自由参加可能・賞金付き大仮面行列」(Großes Maskenpreislaufen für Jedermann)という企画である。これは自由に参加でき、創意工夫の優れた仮装に賞が与えられるという企画のようで、賞金総額が千ライヒスマルクとパンフレットに記載されている。その他に、市内のレストランや酒場はダンスと社交の場となることも記載されている。

そして翌日の火曜日(2月21日)はパンフレットが最も紙面を割いて強調している日である。午前10時から11時にかけて市場でコンサートが行われたらしいが、メインとなるのはやはり午後2時から始まる大パレードである。パンフレットには「ファストナハト大パレード」(Großer Fastnachtumzug)というタイトルと共にその年のモットーが紹介され、「伝統的な道化のパレード」(traditioneller Narro-Umzug)が大パレードに先行すると記載されている。現在でも同様だが、歴史的道化組合が、フィリンゲンのファストナハトに参加する色々な団体の中でも別格の存在となっているのは最初に述べた通りである。恐らくこの年も、モットーの内容に関係なく古めかしい装束で練り歩いたのではないだろうか。

1939年のフィリンゲンのファストナハトのモットーは「道化鏡の世界」(Die Welt im Narrenspiegel)というものだった。これはティル・オイレンシュピーゲルのパロディで、このモットーに従って各団体は、世相を反映した山車を用意することになった。ツインマ

ーマンによると、モットーは当初、ナチス党员であった市長の提案した「世界史上の愚行」(Thorheit in der Weltgeschichte) というイデオロギー色の濃いものだったが、道化組合長を務めていたアルバート・フィッシャーがそれを思想性の薄いものに変更させたという経緯があったようだ。既に第2章で見たとおり、フィッシャーはファストナハトに対して客観的で簡潔な表現を用い、ときにファストナハトにとって不都合な事実も記していた。彼がナチスに迎合しすぎる姿勢に抵抗しようと働きかけるのは当然のことだったと言える。ツインーマンはその時のフィッシャーの発言を紹介している。「自然と政治に関わりすぎるだろうし、そうなったら皮肉は多くなるだろうが、パレードで表現されるユーモアは少なすぎるだろう。」(da man andernfalls zu sehr ins politische Fahrwasser kommen würde und dadurch wohl mehr Ironie, aber zu wenig Humor im Umzug zeigen könnte.)²¹⁾

なお、同じ題名のモットー「道化鏡の世界」(Die Welt im Narrenspiegel) が1938年のケルンのカーネヴァルではモットーになっており、²²⁾ フィッシャーが影響を受けていた可能性は高い。市長の提案をより無難な方向へ修正しようとしたフィッシャーは、新たなモットー候補を慎重に選ばねばならなかっただろう。別の都市、しかもカーネヴァルにおいては中心的な存在だったケルンで既に挙行されていたモットーは、いわばナチス当局にお墨付きをもらった正当なモットーということになる。フィッシャーはそれを利用して、当局に追求されないようにファストナハトに対するナチスの統制を掻い潜ったのではないだろうか。

パンフレットには、各団体がそのモットーに従って山車や仮装で参加しているかが判るタイトルが記載されている。ツインーマンはこれに加え、どういった団体が参加していたのかを記している。それによると、ファストナハトに専門的に従事している道化組合、猫音楽、グロンキ・ギルドの他にも、合唱団や体操クラブ、更には国防軍やヒトラージュメントも団体として参加していたことが分かる²³⁾。

ツインーマンによる『シュヴァルツヴェルダー・ボーテ』紙上での短期連載は、このパンフレットと、1939年2月22日付の『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』の記事を組み合わせで紹介している。しかし、ツインーマンの報告には、この2種類の資料以外の情報も盛り込まれている。新聞記事の性格上、索引は設けられていないが、ツインーマンはこの2種類以外にも資料を用意していた事は確実である。特に、反ナチ的だとされる2つの山車は、パンフレットや『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』には当然ながら記載がなく、1980年のイエッグレの論文にも記述が見当たらず、ツインーマンが写真と共に初めて公表したものである。では次に、これらの出し物を、1939年2月22日付の『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』および、ツインーマンに

21) Schwarzwälder Bote, 15.2.1994.

22) Euler-Schmidt, Michael / Leifeld, Marcus / Festkomitee des Kölner Karnevals von 1823 e.V. (Hrsg.) : Der Kölner Rosenmontagszug 1823-1945. J. P. Bachem Verlag, Köln 2007, S.220-221.

23) なお、現代ではパンフレットにパレードの概要は記されていない。どのような山車が出てきてどのような団体が参加しているかは、主催者に問い合わせるか実物を見るしかない。

よる紹介記事を参照しつつ、写真が現存しているものを中心に、その傾向を分類する。

3. 3 ナチスに関連する出し物

3. 3. 1 ユダヤ人が題材の出し物



図6:「トロイの木馬」の山車

親ナチス的な出し物の中では、やはりユダヤ人を題材にしたものが多い。しかし合計の27団体のうち4団体だけがユダヤ人を揶揄する内容の出し物を出し、全体が反ユダヤ色だけに染まっていたわけでもない。

それらの山車と仮装の中でも、『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』に取り上げられ写真も現存している「トロイの木馬」(Das

trojanische Pferd)は、アメリカ国会議事堂前にトロイの木馬が置いてあり、木馬の中からユダヤ人が出てくるという山車であった(図6参照)。ユダヤ勢力がアメリカ合衆国の心臓部に入り込んで政治的影響力を発揮していることを表現し、さらにそれが「トロイの木馬」と結びついて、ユダヤ人の侵略によるアメリカの内部崩壊を暗示している、非常にメッセージ性の強い山車といえる。「トロイの木馬」を使った山車は1912年のパレードにも登場していたが、それはモットーであったシラーの作品との関係で登場したようで、古代ギリシア風の衣装をまとい、古代建築を思わせるハリボテだったとされている。それと結びつけると、これはフィリンゲンでかつて登場した出し物がナチス化した、変化の象徴とも言える。

3. 3. 2 国際関係が題材の出し物

ユダヤ人とは特に関連なく、ナチスの外交政策や国際情勢を取り上げた出し物を繰り出すケースもあった。こうした題材の山車は、前章で見たように、ナチス政権以前からフィリンゲンでは見られたものである。特に1870年代以降は毎年決められる「モットー」の中に、国際関係を舞台に面白おかしい仮装をする趣旨のものがいくつか実行されていた。これらの仮装はその延長線上にあると言える。例えば、ローマ-ベルリン枢軸や国際連盟など、当時の世相を反映しているだしが登場している。

また、当時の国内事情を題材にした山車もあった。例えば、「ゴミ拾いたち」(Die Altmaterialsammler)はナチスによる「生産戦」(Erzeugungsschlacht)のため、廃品をリサイクルする様子を表したものだそうである。ゴミというモチーフは「ボロをまとった道

化」として、現在のファストナハトでもよく取り上げられる題材である。それが戦時体制と結びついている点は時代を反映している。

3. 3. 3 ナチスとの関連が明らかでない出し物



図7：パレードを先導する「道化鏡の世界」の山車

民衆の祭りとしてのファストナハトの山車が、すべてが親ナチスか否かで分類されるわけではない。むしろ祭りの気分を高める、あるいは観衆の耳目を引くという出し物本来の目論見から作られたような山車も少なからずあった。

祭のモットーをそのまま表現した「道化鏡の世界」は、パレードの先頭を行くブラスバンドに続く最初の

山車として登場している。ティル・オイレンシュピーゲルの像が地球儀の上に立っていて、その地球儀の前後左右に道化、猫、グロンキが位置している（図7参照）。

「火星人のニューヨーク出現とその影響」（Landung der Marsmenschen in New-York und ihre Wirkung）は大掛かりで、2つの山車からできている（図8参照）。1つ目はニューヨークの摩天楼のハリボテで、屋上に高射砲とサイレンがある。サイレンが鳴ると伴走者が防空壕に退避する。2つ目の山車は宇宙船の様な外観の乗り物で、1938年にオーソン・ウェルズがH. G. ウェルズのSF小説『火星襲来』を、臨時ニュースという演出で放送したところ、事実と勘違いされて120万人以上がパニックになった事件がモチーフになっている。

この山車は『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』で取り上げられた写真の中でも、紙面の中心に大きく掲載されるほどインパクトの強い山車だったようである。ユダヤ関係の山車や国際関係に関する山車よりも扱いが上なのである。ツインマーマンによればこの山車は「アメリカ病」（amerikanischen Psychose）を皮肉ったものだという。ツインマーマンが依拠している『シュヴァルツヴェルダー・タークブラット』の記事でも同じ単語が使われている。

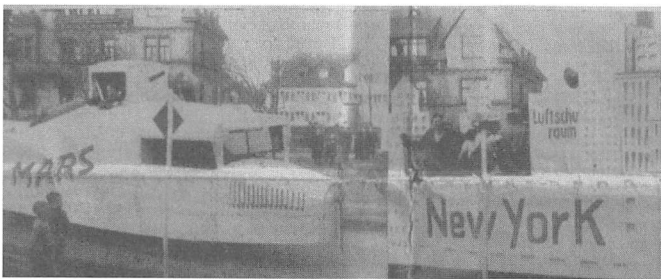


図8：「火星人のニューヨーク出現とその影響」の山車

しかし、「アメリカ病」とは何か、ということについては触れられていない。「アメリカ病」という表現の内容を推測すれば、テクノロジーの発展が人々のあいだに却って無用な混乱を引き起

こすという社会集団的な病理を指しているのかもしれない。第2次世界大戦がすぐそこまで迫った時期に、この山車は何らかの不穏な空気を表現することに成功し、それがフィリンゲンの人々や新聞記者に強い印象を与えたのではないだろうか。

3. 3. 5 反ナチス的な出し物

反ナチス的な出し物は、当然ながら当時のパンフレットや新聞には記載されておらず、ツインマーマンと『マスケラ』によって写真が紹介されたため、その存在が現在まで伝わっていることになる。

1939年にはそうした出し物が2つある。1つは「1848年-50年のフィリンゲンのファストナハト」と題されている。この出し物に参加している道化たちは皆、「伝統的」な装束と仮面を身につけている。よって、この出し物には歴史的な道化組合が関わっていたことが推測される。街の建物を模した山車を練り出し、徒歩での参加者は通常の装束に加えてガラスの嵌っ



図9：「1848年-50年のフィリンゲンのファストナハト」の山車

ていない窓枠を手に持ち、そこから頭を出して練り歩いた(図9、図10参照)。1848年にプロイセン軍の進駐によりファストナハトが禁止された際、祭は「(家の)窓の中ならば良い」という文言を逆手にとって、窓枠を持ち歩いてファストナハトを行ったという故事に由来する出し物である。当時のプロイセン軍とナチスを比較する形で、政権による抑圧を批判していると考えられる。

もうひとつの山車は「我々の前に罪の洪水を (VOR UNS DIE SÜNDFLUT)」と題され



図10：図9と同じ集団だが、こちらは徒歩の道化が写っている。

ている(図11参照)。こちらもパンフレットなどには記載されていない。「ノアの箱舟Ⅱ」と描かれた船の形の山車にユダヤ人らしき格好の人々が乗り込んでいる。ナチスのユダヤ人排斥に対し、彼らが箱舟に乗って救われている光景を表しているように見える。通常は „Nach uns die Sintflut!“ で「あ

とは野となれ山となれ」のような意味で使われる言い回しだが、洪水で人類の悪がすべて押し流された後で「ノアの方舟Ⅱ」に乗り組んで新しい世界をつくるために登場するのが

ユダヤ人なのだ、というメッセージが込められているのかもしれない。この写真については、グロンキ・ギルドが山車を用意した、という補足情報が残っているのみである。ユダヤ人は既に迫害された時期なのでユダヤ人自身が山車を用意することはありえないが、ユダヤ人側に立って表現を試みる山車はあってもおかしくない。

3. 4 結論：1914年から1939年までの大パレードの変遷

イエッグレは1980年の論文で、ファストナハトそのものがナチズムと本質的には共通



図11：「ノアの箱舟Ⅱ」の山車。「我々の前に罪の洪水を」と書かれている。

点を持つという指摘をしている²⁴⁾。その共通点とは「ドイツ民族の統合」(Einheit des Volkes)、「失われた故郷の再現」(Heimat, die verlorene, wird vorgeführt)、「懐古主義的」(Geschichtlich ist natürlich)、「批判者の役割化」(Die Rolle des Miesmachers)²⁵⁾ というものであった。もちろんイエッグレ自身も、ファストナハトがナチズムに直に結びついたなどと短絡的に結論

づけるつもりはないと明言している²⁶⁾。

イエッグレはナチスが政権を獲得した後のシュヴァーベン各都市で開催されたファストナハトを横断的に参照したわけだが、フィリンゲンに絞って年代を追って変遷を観察すると、異なった様子も見えてくる。

アルバート・フィッシャーによってまとめられたナチス政権以前のファストナハトには、祝祭構造が徐々に整うと同時に、郷土愛とナショナリズムが高揚し、観光地化するといった傾向が見られた。こうした傾向の延長線上に1939年のファストナハトも位置するだろう。つまり、ナチス化した祝祭というのは、確かに行政側から強制された部分もあったが、逆に市民や大衆が元々望んでいた願望の発露にもなったとも言える。イエッグレによれば、ファストナハトやカーネヴァルといった謝肉祭に対して、ナチス政権は終始好意的であった。また、フィッシャーによる実証的な記録が出版されていたにもかかわらず、ファストナハトは太古から連綿と続くゲルマン的なものだという見方が常識的になっていた。それは、郷土史家のヘルマン・エリス・ブッセ (Hermann Eris Busse) から大家であ

24) Jeggel, Utz: Fastnacht im Dritten Reich. In: Tübinger Vereinigung für Volkskunde (hrsg.): Narrenfreiheit, Beiträge zur Fastnachtsforschung. Tübingen 1980, S.235-236.

25) Jeggelによれば、各人が自由に不平を述べることが出来ず、ナチズムやファストナハト主催者の設定した敵を非難するべきと批判がシステム化して固定されていることを指す。ibid. S.235

26) ibid. S.236.

るハンス・ナウマン (Hans Naumann) に至るまでの民俗学に携わる人々が、ファストナハトはゲルマンの古習俗を直接受け継ぎ保存し続けてきたものだと主張し、1920年代に盛んに啓蒙活動を行ってきた結果であった²⁷⁾ その活動は、ゲルマン民族の歴史の探求と「伝統」の復古を推奨するナチスと歩調を合わせていたと言える。

しかし、謝肉祭の「伝統」を受け継ぐと自負するファストナハト主催者側から見れば、ナチス化したファストナハトには欠けているものがあつた。それは体制に対する反抗、風刺である。

バフチンのカーネヴァル論や、実際に反乱に結びついた事例などを見れば、²⁸⁾ 祝祭と社会革命の関係はファストナハト、ファッシング、カーネヴァルといったドイツ語圏における謝肉祭全般や、その他の祭など広い範囲に適用されるものだろう。しかし、かつてと異なり、祝祭がもはや社会変革と結びつく可能性は少ない。それでも反抗する素振りくらいは見せなければファストナハトは謝肉祭たりえない、とフィリンゲンの一部の人々は思っていたかもしれない。

そうした人々にとって、ナチス政権による「統制」(Gleichschaltung) は納得のいくものではなかつただろう。ファストナハトを組織化し、全国的に一律に実施するなどというのは、たとえ外見が懐古的であっても昔は存在しえなかつた事態である。確かに、19世紀から徐々に「郷土愛国心」(Lokalspatrisotismus) の「郷土」(Lokal) の部分が薄れてきてはいたが、同時に観光化が進んでいたことによって²⁹⁾、フィリンゲンの人々の中には、はいわば「おらが町のファストナハトは唯一無二」という意識を持っていた者もいたに違いない。この点において彼らは一ツインマーマンの表現を借りれば「仮面の下の抵抗」(Opposition hinter der Scheme) を試みた³⁰⁾。それがパレードの記録にない番外編の2台の山車で、彼らが表現したかつたことなのだろう。

27) VSAN:1999. S.21-22. 特に、民俗学者たちが「folk」(Volk) 概念の定義を巡って論考を進めるうちに、ナチズムと歩み寄つたことは、河野真が『ドイツ民俗学とナチズム』(創土社、2005)において詳細に論じている。また、河野は第二次大戦後の民俗学がナチズムと決別しようとした動向も指摘している。河野は特に、戦前の民俗学で支配的であつたfolk (Volk) 概念を巡る問題に、ヘルマン・バウジンガー (Hermann Bausinger) が1960年代から取り組んできたことに注目している。バウジンガーは、民俗現象に対して実証的な調査結果よりも、想像上の概念のほうが社会的に重視されてきたことを挙げ、その現象に「後退」(Regression) という心理学用語を当てはめた。バウジンガーによれば、民俗学研究は20世紀になってから、積み重ねられた実証的な成果を無視して19世紀的な想念 (Idee) に回帰した。この「後退」によって想念に回帰したおかげで、民俗学は学問分野として成立できるだけの勢力となつた。そしてこの想念こそは、ナチズムへ民俗学が迎合した要因でもあるとしている (前掲書S.623)。また、河野は、こうした想念が、逆に実際に祝祭を担う人々へと逆流し、儀礼が変容するのみならず、新たな儀礼が誕生してゆく現象についても言及している (前掲書S.352-355)。こうした問題は『創られた伝統』(ホブズボウム、E/レンジャー、T/前川啓二他訳、紀伊國屋書店、1992) によって社会一般に見られる現象として論じられ、さらに、『定本 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』(アンダーソン、B/白石隆他訳、書籍工房早山、2007) によって、ナショナリズムの形成について論じられている。ドイツ語圏の民俗学はナチスからの脱却を目標とした際に、ホブズボウムやアンダーソンらに先んじてこれらの問題に取り組んでいた。

28) ラデュリ、E・ル・ロワ (蔵持不三也訳)：『南仏ロマンの謝肉祭 反乱の想像力』(新評論、2002)

29) 1920年代には既に観光地としての体制が整つていた。HNV: 2007, S.78.

第4章 戦後のファストナハト

戦後のファストナハトについては、やはり歴史的道化組合が出版した『マスケラ』が重要な情報源となる。それによると、まずパレードからモットーが消滅し、「鍵の奪取」(Schlüsselübergabe)、「道化裁判」(Narrengericht)、「藁を燃やす」(Strohverbrennen)という、「伝統的」な行事が相次いで開始された³¹⁾。

戦後、1947年に道化組合再結成の動きがあり、48年にファストナハトは復活した。この時すでにパレードからモットーは消滅していたようで、記録には残っていない。なお、かのアルバート・フィッシャーにとっては、この48年のファストナハト復活が組合長としての最後の仕事になる。75歳になっていた彼は翌49年に後進に座を譲り勇退する³²⁾。

そして、何か新規の出し物が欲しいという気運のもとで、50年からファストナハトは様変わりする。50年には、元サッカー選手の発案で、サッカー国際親善試合のパロディなるものが演じられたが、結局これは1年だけで終わり、51年にはそれに代わって道化裁判が開廷されることになった。これは、道化たちが裁判官、検事、弁護士、書記などに扮し、フィリンゲンの有名人や有力者を被告として、日頃の行いを審理し、何らかの処罰を与えるものであった。『マスケラ』は、シュトックアッハ (Stockach) という都市の道化組合が謝肉祭劇として道化裁判を行っており、それをフィリンゲンに持ち込んだのではないかと推測している。この行事は1970年代初めまで続けられていた。

道化裁判の開廷と同じ年に、市庁舎で初めて市長と道化組合長が舌戦を繰り広げ、組合長が市長から鍵を奪取した。また、55年にはファストナハトの最後に藁を燃やす行事が追加された。この「何かを燃やす」行事に関しては、フィリンゲンより西側のフライブルク近郊で行われていた風習だったことが、1920年代から30年代にかけての調査で明らかになっている³³⁾。シュトックアッハ、フライブルクの道化組合は、フィリンゲンと共にシュヴァーベン・アレマン道化組合連盟の最初期からのメンバーであり、お互いに協力体制にあった。そのため、両都市の行事を取り入れることができたのだろう。

こうして、フィリンゲンのファストナハトは現在行われている姿になった。では、戦後に生じたこのような変化にどのような解釈が可能だろうか。特に、パレードと共に登場したモットーがパレードを残したまま消滅したことは、見逃すことはできない。戦後再開された時点(1948年)にはすでに消えていたモットーだが、その変化の前兆は、やはり中断前の1939年からあったのではないだろうか。

30) Zimmermann, Michael: Villinger Fasnet unter dem Hakenkreuz, in: Schwabwälder Bote, Oberndorf 11.2.1994. SchemeはMaskeと同じく「仮面」を指す単語である。

31) HNV: 2007, S.76-78.

32) とは言え、ファストナハトから完全に離れたわけではなく、シュヴァーベン・アレマン道化組合連盟の2代目代表の職務は、1927年に選出されて以来51年まで務め上げた。これは彼が没する1年前である。ワイマール時代から戦後まで彼はシュヴァーベン地方全体のファストナハトに影響を及ぼしていたことになる。VSAN: 2007, S.291.

33) VSAN:1999, S.210.

ここで注目すべきは、前章での道化組合長アルバート・フィッシャーとフィリンゲン市長とのやり取りではないだろうか。ナチス政権側だった市長は、モットーによってファストナハトをナチズムへと誘導しようとした。フィッシャーはそれに抵抗し、モットーをすり替えたのである。だがしかし、モットーを変更した状態でも39年のファストナハトはナチス色の強いものとなった。これは、第2章で見てきたように、モットーそのものが政治的メッセージを発する道具として利用され続けてきたからではないだろうか。第3章で紹介したフィッシャーの発言からは、彼自身がそうした傾向を認識していたことが読み取れる。だからこそ、その反省を踏まえてモットーそのものをパレードから削除する方法が採られたのだろう。

また、フィリンゲンのファストナハト関係者が絶えず意識している、ケルンのカーネヴァルとの対比も考慮に入れるべきだろう。ケルンでは大戦を経てもなお今だにモットーが存在し、人々はそれに則って地元からEU、諸外国のニュースに至るまで、様々な時事問題を取り上げて風刺の牙を突き立てている³⁴⁾。つまり、フィリンゲンにもモットーを捨てないという選択肢があったはずである。ここで、ナチスによる「統制」(Gleichschaltung)を受けたファストナハトの特徴をもう一度確認してみる。ナチス政権がファストナハトやカーネヴァルを推進した背景には、この祝祭がゲルマン民族の「伝統」であるという民俗学の主張を受け入れた側面がある。ナチスは祝祭を全国統一の規格で開催させようとしたが、その際の基準となる祝祭の形式はどのようなものだっただろうか。ここで、民俗学者とナチス政権との間に、認識のズレがあったと考えられる。ブッセら民俗学者の主張の受け入れ方によっては、木彫りの仮面や古めかしい装束が第三帝国時代のファストナハトを席卷したとしてもおかしくはなかったが、実際はそうはならなかった。ナチス的なファストナハトとは第3章で見たとおり、ユダヤ人はおろか火星人まで登場する現代的なものだった。こうした、モットーとパレードを中心とする祝祭が、本来はフィリンゲンにとっては外来のものだったことは、既に第2章の冒頭で見たとおりである。そして、その事をナチス政権以前に最初に言及したのは他ならぬフィッシャーだった。彼は、ここに活路を見出したのではないだろうか。ナチスが外からフィリンゲンを侵食してきた原因として、モットーを掲げたパレードを排除したのだと考えることができる。

そして、その代わり、古式の仮面と装束を擁する歴史的道化組合がかろうじて生き延びることができた。もとより、歴史的道化組合とモットーは相性が悪い。伝統的な装束しか身につけられない歴史的道化組合は、モットーが盛んに掲げられた時代の写真を見ても、相変わらず木彫りの仮面と伝統的な装束をまとっていた。彼らは衣装と仮面の制限のせいでモットーのあるパレードに参加しづらかっただけではない。1939年には言論統制批判までやったのだから、心情的にも相容れないものがあったのではないだろうか。モットー

34) Euler-Schmidt, Michael / Leifeld, Marcus / Festkomitee des Kölner Karnevals von 1823 e.V. (Hrsg.): Der Kölner Rosenmontagszug 1949-2009. J. P. Bachem Verlag, Köln 2009, S.169-229.

とは、最初に挙げた第3グループのためのものだったと言える。

しかしながら、その第3のグループによるパレードのおかげで、フィリンゲンのファストナハトの存続が可能になった時代があったことも確かである。今は歴史的道化組合の影になり、祭の喧騒を盛り上げるのみにとどまっている集団は、150年前は確かに祝祭の在り様を左右し、戦争の洪水に巻き込まれながらもその使命を果たし、退いたと言える。

その一方で伝統儀式は、古式のファストナハトを再現するだけでなく、それ自体がメッセージであると受け取れないだろうか。先の、39年のフィッシャーと市長のやり取りを踏まえたとえで、道化裁判とそしてなにより「鍵の奪取」の儀式に着目すると、そこには39年への反省が込められているように思われる。市長から実権を奪うという反骨の精神を古式の儀式として実践に移すということは、そうした精神こそが自らにとって根本的なものであると自己主張していると言える。

さて、本稿でフィリンゲンのファストナハトを通史的に概観してきたことにより、この祝祭が自然界や宗教的な存在に対する観念から生み出されたものではなく、実は極めて社会的な事象として生まれ、成長してきたものだということが明らかになった。つまり本稿では「創られた伝統」のうちの「創られた」に焦点を当てた。ファストナハトを、古来の儀礼行為がそのまま残っているものと捉えることはもはや不可能である。フィリンゲンはむしろ意識して儀礼行為を選び取ったのである。しかし、その儀礼行為の構造を分析してゆくことは無意味なことではない。古来より受け継がれてきた儀礼行為と比較すると、ファストナハトは近代に発生した事象であるため、より一層、儀礼行為としてのあり方が問われるべきである。なぜなら、フィリンゲンがあえて儀礼を選んだならば、目指すべきはファストナハトを儀礼として完成させることである。今後は「創られた伝統」の「伝統」の面に焦点を当てて、祝祭そのものの構造の分析により詳細に取り組みたいと思う。

図版の出典

図1、5 筆者作成

図2～4 筆者撮影

図6 Schwarzwälder Bote, 12.2.1994

図7 Schwarzwälder Tagblatt, 21.2.1939

図8 Schwarzwälder Bote, 10.2.1994

図9 Schwarzwälder Bote, 11.2.1994

図10 HNV: 2007, S.78.

図11 Schwarzwälder Bote, 15.2.1994

Die Schwäbische Fastnacht

Eine Betrachtung ihrer festlichen Struktur im Wandel ihrer Geschichte

HAYASHI Keita

In Schwaben veranstaltet man auch noch heutigentags eine „traditionelle“ Fastnacht. Besonders in der Stadt Villingen kann man typische „traditionelle“ Züge beobachten. Trotz ihres altmodischen Anscheins beginnt die schwäbische Fastnacht ihre Entwicklung erst seit dem 19. Jahrhundert. Und letztlich erlangten ihre „traditionellen“ Bräuche auch die Zeit nach dem Zweiten Weltkrieg. Zudem verminderten sich dadurch gleichzeitig die des „modernen“ Umzugs, der einer der Mittelpunkte der Villingener Fastnacht in den Vorkriegszeiten war. Diese Veränderung hatte einigen Einfluss auf die Veranstaltungszünfte der Villingener Fastnacht. Im größten Teil der Besucher, nicht nur der Schaulustigen, sondern auch der Akademiker hatte man die Tendenz, die „Historische Narrozunft Villingen 1467.e.V.“ als eine einzige Verwaltungszunft der Fastnacht zu betrachten. In Wirklichkeit gibt es verschiedene Zünfte in Villingen, die sich zwar nicht „traditionell“ ausschmücken, die aber auch an der Fastnacht teilnehmen. Diese nicht „traditionell“ gekleideten Zünfte hatten im Zusammenhang mit der Entwicklung seit dem 19. Jahrhundert bis 1939 gestanden.

Der ehemalige Villingener Narrenzunftmeister Albert Fischer verfasste eine Einführung über die Villingener Fastnacht, in der man drei verschiedene Stadien des Umzugs in Villingen bestätigt findet. Die ersten Verwaltungsverfahren fanden 1843 statt, dabei wurden die ersten grundlegenden Aufführungsverfahren des Festes festgelegt. An diesen Entwicklungsstufen kann man nur wenige „traditionelle“ Elemente ablesen. Dennoch hatte in diesem Jahr der Umzug ein Thema (im fastnächtlichen Ausdruck „Motto“) das aus dem römischen Mythos übernommen wurde: Die Erscheinung des Bacchus und anderer römischer Götter. Auf der nächsten Entwicklungsebene stellte man einen Zusammenschluß mit der Heimatkunde und dem nationalen Prestige zu dem „Motto“ für den Umzug her. Ganze Fastnachtstage wurden als eine Wiederbeschwörung der Verteidigungsschlacht gegen die französische Armee von 1704 dargestellt. Zwischen den Jahren 1910-14 hatte das Motto noch prachtvollere und dichterische Darstellungen zum Gegenstand: die mittelalterlichen Minnesänger oder beide deutsche Dichtervorläufer, Schiller und Goethe, erschienen auf dem Umzug. Außerdem wurden Volkslieder, Sagen und Märchen zum Motto ausgewählt.

Einige Akademiker und Lokalhistoriker stellen den Umzug von 1939 zur Diskussion, der in der letzten Fastnacht vor dem Ausbruch des Kriegs veranstaltet wurde. Einerseits war diese Fastnacht eine gute Gelegenheit für die NS-Propaganda und eine Unterstützung für

das Villinger Bürgertum. Die NS-Regierung betrieb ihre Gleichschaltungspolitik auch auf dem Gebiet der Fastnacht. Andererseits versuchte man in dieser Fastnacht einige Proteste gegen die Regierung zu erheben. Einige Narren fuhren auf satirischen Festwagen. Der Narrenzunftmeister Albert Fischer ersetzte auch das Motto durch ein anderes auf seine eigene Verantwortung. Nach dem Krieg führte man die Fastnacht wieder offiziell ein. Aber das Motto des Umzugs verschwand und rituelle Bräuche wurden als „Tradition“ neu eingeführt. Diese Bräuche waren Parodien und Staatsstreiche, daher kann man diese Bräuche als Selbstkritik ehemaliger Zeiten interpretieren.